



淡座

江戸にまなび、
音と言葉のあわいをえがく

淡座(あわいざ)は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイショングループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでも、とりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものの在り方を模索し、作品や演奏として発信しています。

「バッハの場」今後の開催日程

2021年 8月21日(土)・9月18日(土)
10月23日(土)・11月20日(土)・12月18日(土)

会場……安養院 瑠璃光堂 (東京都板橋区東新町2-30-23)
詳細は、淡座ウェブサイト、SNS等で更新してまいります。

入場料：各回 2,000円 (限定60席)・配信チケット：各回 1,000円

メール：info@awaiza.com ・お電話：080-4091-6491



◀次回のご予約はこちら



▶配信チケットのご購入はこちら
本日の演奏をアーカイブで
もう一度お楽しみ頂くこともできます

バッハの音楽は「場」になる。

「距離を取る」ことが求められる今こそ追求する独奏で「場」に触れ、疫病退散を祈念する連続演奏会。

あわいざ 淡座リサイタルシリーズ Vol.2



淡座リサイタルシリーズ Vol.2
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会
バッハの場 第1回

日時 2021年7月10日(土)
15:30 開場
16:00 開演
会場 安養院 瑠璃光堂
三瀬俊吾 (ヴァイオリン)
竹本聖子 (チェロ)
桑原ゆう (作曲・編曲)
今回は、本條秀慈郎はお休みです

映像協力/株式会社たんどる
宣伝美術/桑原ゆう
主催/一般社団法人淡座
共催/安養院

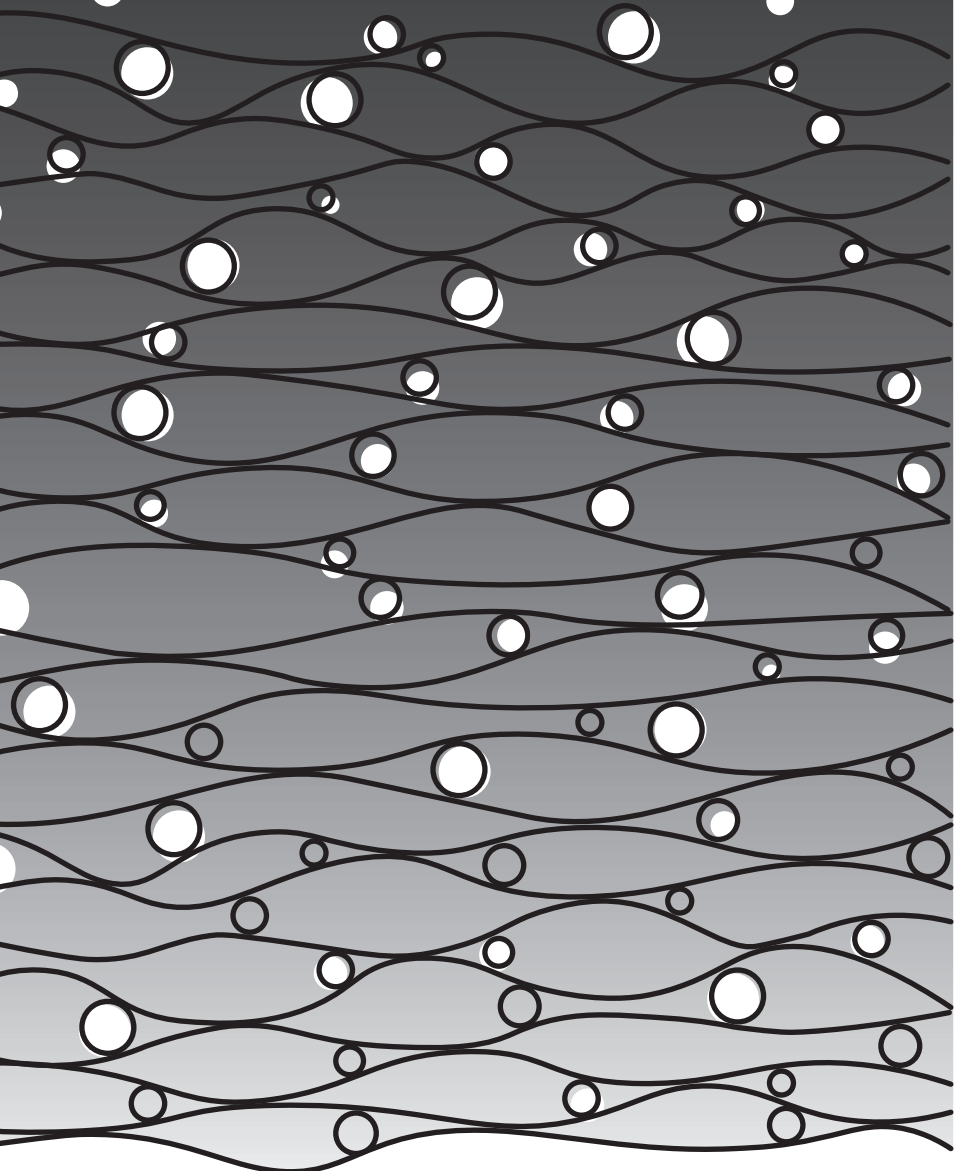
場

12画

ジヨウ(チャウ) ば・にわ

易は玉(日)を台(一)の上に置き、玉の光が下方に反射する形。易は霊の力を持つと考えられた玉によって、人の精気を盛んにし、豊かにする魂振りの儀式をいい、その儀式の行われるところを場という。また神を祭るところを場と

いった。
(白川静「常用字解」平凡社より)



感染症対策のひとつ「人と人との接触を最小限に留めること」を逆手に取り、独奏を追求するリサイタルシリーズ。

ひと月に1回ペースの全6回公演で、三瀬と竹本が、バッハの無伴奏全曲演奏に挑戦。桑原作品を組み合わせたプログラムで、ふたりの独奏を存分にご堪能いただけます。第6回は、ゲストとして、安養院にゆかりのあるフルート奏者、瀧本実里さんをお迎えします。

各回、アフターイベントで作品や演奏をさらに深掘りし、次の回につなげていきます。第3回以降、安養院内庭園舞台での演奏も検討しており、バッハの「場」を淡座ならではの視点で、多角的に追求する試みです。

● 曲目と解説

バッハの大海に乗り出す第1回は、ソロだけでなく、デュオの演奏もお届けします。

バッハは1685年に生まれ、1750年に亡くなりました。日本は時に江戸時代。「暴れん坊将軍」徳川吉宗は1684年に生まれ、1751年に亡くなり、バッハと生死をほとんど同じくしています。

J.S.バッハ／無伴奏チェロ組曲 第1番ト長調 BWV1007

冒頭の「ソレシラシレシレ」は、誰もが一度は耳にしたことがあるのではないだろうか。これからどのような旅が始まるのだろうかという期待の詰まったプレリュードに始まり、五つの舞曲が続いていく。

リュートのように滑らかで、多声的な特徴のアルマンド。クーラントは、「走る」を語源に持つ軽快な三拍子。サラバンドは、一拍目から二、三拍目へと、大波小波が押し寄せるよう。第4曲は流行りの舞曲が用いられており、今回はメヌエット。一部と二部に分かれ、二部で描かれる四度下降の音型は古くからの定番で、儂く美しい。最後はジグ、締め括りにふさわしい快活な踊り。

曲中、さまざまな声部が折り重なりながら現れてくる。実際に書かれていなくても鳴っているであろう音を想像したり、一箇所にとどまることなく移ろう調性の行方を追いかけたり、右手で音を息づかせたり…、細かなことの積み重ねが、バッハという音楽を形作っている。

カザルスが古本屋で埋もれていたバッハの楽譜を初めて手にしたときのワクワクした思いと重なるように、この曲への尽きぬ好奇心を皆さまと味わえたらと思っている。

(文／竹本 聖子)

J.S.バッハ／無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第1番 ト短調 BWV1001

- 第1楽章－Adagio アダージオ 4/4 ト短調
- 第2楽章－Fuga. Allegro フーガ、アレグロ 2/2 ト短調
- 第3楽章－Siciliana シシリアーナ 12/8 変ロ長調
- 第4楽章－Presto プレスト 3/8 ト短調

このソナタは、バロック時代に一般的だった教会ソナタという形式で作曲されている。四つの楽章のテンポが、緩→急→緩→急の順番になっており、第2番、第3番のソナタも同様の形式である。

チェロ組曲の第1番と対照的に、ト短調で重々しい第1楽章。第2楽章のフーガは、複数の声部を一人で演奏するため、四本の弦を駆使した楽譜となっている。唯一の長調である第3楽章は、シシリアーナが意味する冒頭の付点のリズムが全体を支配し、フーガ同様に多声部でこのリズムが演奏される。第4楽章のプレストは「すぐに」という意味で、もともとは速度ではなく、時間的な早さを意味する。16分音符が連続するが、イレギュラーなスラーに意表を突かれる。

(文／三瀬 俊吾)



桑原ゆう／玉と鍵（2020）

「花火屋は、何れも稲荷の氏子なり」という川柳があるそうです。お稲荷さんの狐が、一方は玉をくわえ、もう一方は鍵をくわえていたところから、花火屋が創業する際に、玉と鍵を屋号にしたことを詠んだものです。両国の川開きでは、玉屋、鍵屋が川の上下に船を出し、競うように花火をあげ、「たまやー」「かぎやー」という、人々の声が飛び交いました。

2018年、第二回本公演のために《三味三味》を書きました。三味線の本條秀慈郎くんが、師匠の本條秀太郎先生と差し向かいで競演する作品です。それを気に入った竹本さんの、《三味三味》のような作品を演奏してみたいという声に応え、昨年開催した第四回本公演「花火」のために書いた本作。

玉と鍵を点と線の関係、もしくは、丸と矢印の関係に読み替え、音の要素として用いました。ヴァイオリンとチェロは、お稲荷さんの狐のごとく、ステージの両端を守るかのように、出来る限り離れて配置し、互いに見計って演奏します。

桑原ゆう／花のフーガ

～ 滝廉太郎『花』を主題としたフーガ（2019）

淡座のレパトリーに、本條秀太郎先生作曲、桑原ゆう編曲による、《花の風雅》という曲があります。それと続けて演奏することを想定し、駄洒落で作曲した、皆さんもお馴染みの『花』の旋律を主題としたフーガです。

中ほどに、『花』と似た別の旋律がこっそり挿入されます。クラシック音楽の有名なあの曲ですので、ぜひ聴き当ててみてください。私は「春のうららの…」と口ずさんでいると、気付いたら、こちらの旋律にすり替わっていることがあるのです。

J.S.バッハ（桑原ゆう編曲）／主よ、人の望みの喜びよ

（カンタータ第147番『心と口と行いと生活で』より）

誰もが一度は耳にしたことのある、大変有名なこの旋律は、1723年にバッハが教会カンタータ第147番『心と口と行いと生活で』の第6曲、第10曲のコラールとして作曲したものです。元々は、トランペット、ヴァイオリン×2、ヴィオラ、オーボエ、ファゴット、合唱、通奏低音という編成。様々な楽器で編曲版が演奏されていますが、旋律楽器のみならず、ほとんど力づくで演奏してしまう今回のようなヴァージョンはめずらしいはず。です。

(文／桑原 ゆう)